

令和7年度 山梨県立やまびこ支援学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

学校目標・経営方針	自立と社会参加を目指すために個に応じた指導の充実を図り、家庭や地域と連携して主体性をもって生きる心豊かな人間を育てる。
-----------	---

山梨県立やまびこ支援学校校長 小嶋 加津美

本年度の重点目標	基礎的・基本的な知識及び技能の習得と情報活用能力の育成	達成度	A	ほぼ達成できた。(8割以上)	評価	4	良くできている。
	自ら考え、判断、表現する力の育成		B	概ね達成できた。(6割以上)		3	できている。
	学びに向かう力、社会と関わりながらよりよく生きるための人間性の育成		C	不十分である。(4割以上)		2	あまりできていない。
	豊かな心と健やかな体の育成		D	達成できなかった。(4割以下)		1	できていない。

自己評価				学校関係者評価				
本年度の重点目標				年度末評価(1月 日現在)				
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策	実施日(令和8年1月 日)	
				評価	意見・要望等			
1	体験的な学習を設定し、基礎的・基本的な知識、技能を習得するとともに教科横断的に情報活用能力を育成する。	基礎的・基本的な知識や技能を体験的に身に付けたり、ICTを活用したりして定着を図る。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価	校内研究を通して情報活用能力について協議を重ね、ICT機器の有用性と実体験の重要性を融合し学習効果を最大化する取り組みができた。各学部ごとに育成すべき情報活用能力のポイントを整理することができた。 学部間で指導内容を確認し、学校全体で指導の連続性を意識した授業づくりが進んだ。	B	教科横断的・系統的な視点でのさらなる検討を行う。校内研究を進め実践の蓄積と児童生徒の変容を追求なかで、学部を超えた授業改善の仕組みづくりを行う。 単元配列表を各学部共通した様式を用いるように改善を図り、指導の連続性を深める。	3	タブレット活用により、発話が難しい児童生徒の表現手段が広がり、保護者との共有も有意義である。 校内研究を通じて、授業改善の成果(インプット/アウトプット、ICTと実体験の併用)が現れている。 学部間連携による授業改善が児童生徒の意欲向上につながっている。 ICTへの過度依存を避け、実体験とのバランスを重視した学習を進める。教科横断、単元配列表の活用など、カリキュラムの体系化をさらに進める。児童生徒の興味に沿ったゲーム性のある教材の開発を検討する。 一人ひとりに合ったICT活用方法を見出し、学校外での活用にもつなげる。
		校内研究で情報活用能力の育成に係る授業づくりを行い、考察する。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価					
		単元配列表を基本に、児童生徒の実態に即した学習内容を個別の指導計画に基づき実施する。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価					
2	教師が支援を選択し、児童生徒が主体的に学びに向かい、思考判断表現できるような機会を設定したり環境づくりを行ったりする。	教師の専門性を高めるために、専門家を活用したり、個人、校内で研修を計画し実施したりする。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価 自己観察書	外部専門家活用や校内基礎研修を実施した。気持ちの安定、行動、異性に関する課題、運動、補助具等で指導助言を受け指導・支援につながった。応用行動分析を用いた対応についての講義と事例検討を行い効果的な指導実践につながった。 PDCAサイクルに基づいて授業が展開できる体制を継続している。 共通教材の有効活用について係を中心に検討が進んだ。	B	障害の重度化、多様化に対応するために外部専門家を活用し専門性を高める。校内支援の活用を進めるために、周知していくとともに、教員間で情報共有、グループ協議ができるような実践的で対話的な研修を計画していく。 共通教材の有効活用に向けて、教材購入、整理、管理方法の検討を進める。	4	外部専門家の研修が指導改善につながり、専門性向上が進んでいる。実態に応じた個別支援が丁寧に行われ、学習活動が充実している。教員のモチベーションが高く、校内連携が円滑である。 専門家の助言を自分の指導に落とし込み、継続的に改善していく。障がい特性に応じた支援ポイントを共有し、二次障害を防ぐ体制を強化する。保護者(卒業生保護者等)の経験を学ぶ機会を取り入れる。PDCAを重視した授業改善と共通教材活用の効率化を進める。
		授業をPDCAサイクルで実施し、計画、評価について各グループで意見交換し多角的に評価する。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価					
		共通教材を有効活用し、時間を効率的に活用することで児童生徒の実態に応じた教材づくりを行う。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価					
3	社会参加を見据えて、他者や地域の人々と関わり主体的に活動し、他者を思いやる気持ちを持ち、多様性を認め合ったりする。	児童生徒が、主体的なかかわりが持てるように、地域、学校、居住地といった交流及び共同学習を継続する。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価	交流及び共同学習で、直接交流や作品交流といった間接交流など目的に応じた参加の形態で、地域の一人として活動に取り組めた。 課題となっていた地域交流に関して、新たな交流相手を探る中で、学校運営協議会委員の助言により、地域で活動する団体を紹介していただき、共同学習を実施できるようになった。 児童生徒総会、全校集会等様々な活動を通して、児童生徒全員で協働しようとする意識の高まりが見られた。	B	引き続き交流及び共同学習に関する学習活動を教育課程に位置づけ、単発の学習にらず事前事後の学習も含め計画的に取り組む。 障害の重度化、多様化に対応するため、個に応じた指導を充実させながら、児童生徒が自己選択、自己決定、他者との協働を意識した環境づくりを意図的に行う。	3	カフェベルや地域団体、近隣校との交流が社会参加に有効である。地域住民との交流が共生理解の促進にもつながっている。 新たな実習先の開拓が進路の可能性を広げている。 進路の地域事情を踏まえ、小学部段階から保護者と情報共有する。交流機会をさらに増やし、地域全体で子どもを支える環境をつくる。東部6市町村との連携をさらに拡大する。委員も交流の場づくりに協力できる体制を整える。
		学校以外の方々と交流できる場を設け、社会性やコミュニケーション能力などを高める。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価					
		学年、学部、全校といった集団活動の特徴を生かし、相手のことを受け入れたり、思いやりが持てたりできるような環境づくりを行う。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価					
4	生活を活力あるものにするために、生の芸術に触れ感性を高めたり、運動、健康、安全、衛生、食に対して生活習慣を定着させたりする。	運動、食事、衛生に対して、望ましい生活習慣となるよう繰り返し、丁寧な指導を継続する。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価	保健講習会、歯科指導、摂食指導など、専門家による講習会や児童生徒への直接指導を実施することで、教職員が学ぶ機会となり、日々の指導に生かされた。 全校や学部に向けて、弦楽四重奏やバイオリンコンサートなど生の芸術に触れる機会を設定し、鑑賞したり体験したりすることができた。 児童生徒は、年2回の避難訓練と年4回のシェイクアウト訓練など防災へ備える意識と力が高まった。係が中心となり熱中症、落雷、クマ出没の対策と情報共有の徹底を図ったことで安心安全な環境を提供することができた。	B	専門家を活用し、児童生徒の健康管理と望ましい生活習慣を身に付けさせる丁寧な指導を継続して行う。体験的活動を重視し地域・社会の人材を活用を図り、体育的、文化的活動をさらに発展できるように引き続き計画していく。 防災については、対応マニュアルの作成、確認、改善を図り、職員間で役割を確認したり、施設設備について理解したりして、安心安全な学校を持続していく。	4	音楽鑑賞など芸術体験が児童生徒の感性を豊かにしている。避難訓練や熊対策など、安全確保の取組が適切に行われている。猛暑・熊出没時の対応など迅速できめ細かな対応がなされている。特別スポーツ大会での交流が有意義である。 障がい特性に配慮した避難方法を取り入れ、防災の専門的学びを深める。地域音楽団体や防災士との協働を検討する。多様な体験活動を継続し、児童生徒の経験値を高める。
		文化的な学校行事を計画し、児童生徒の感性を刺激し豊かな心を育む。	個別の指導計画 学校評価アンケート 学部等取り組み評価					
		児童生徒が安全に過ごせるように、職員間で役割を確認したり、施設設備について点検したりする。持続可能な体制づくりをおこなう。	学校評価アンケート 学部等取り組み評価					
5	教職員が働きやすい環境づくりを推進する。	教職員の勤務時間や健康管理を意識した働き方を推進する。	各種アンケートの検証 教職員のストレスチェック結果の分析	働き方ワークショップを通して、働き方改革の具体的な取り組みを進めた。下校方法の見直しにより、職員の休憩時間確保につながった。校務支援システムの活用、リモート会議推奨、効率的な会議の運営、ペーパーレス化を進めた。	B	教職員の全体的意見を踏まえ会議や不要な業務を削いで時間を生み出し、個人の得意分野を活かしながらチームで支え合う体制へシフトすることが共通の方向性となる。まずは「やらなくてもなんとかなるもの」を具体化し、時間の捻出を目指す。寄せられた意見から具体案を考え試行していく。	3	教職員の健康を重視する姿勢が児童生徒にも良い影響を与えている。アンケートを基にした改善(定時退勤促進、会議効率化等)が進められている。支援システム導入により業務効率化が期待されている。職場の雰囲気や人間関係が良好である。 働き方改革の中でも、保護者対応や職員関係が希薄にならないよう配慮する。若手教員の専門性向上のため研修をさらに充実させる。会議の目的を明確にし、負担を減らしつつ質を高める。教員の私生活にも配慮した職場環境づくりを継続する。
		校務DXを推進する。	校務支援システムの活用と検証 リモート等、効率的な会議の運営 ペーパーレス化					